

太宰治
走れメロス



メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王じやちばうぎやくを除かなければなら



ぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して來た。けれども邪惡に対しては、人一倍に敏感であつた。きょう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此このシラクスの市にやつて來た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮しだ。この妹は、村の或る律氣な一牧人を、近々、花婿はなむことして迎える事になつていた。結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣裳やら祝宴の御馳走やらを買ひに、はるばる市にやつて來たのだ。先ず、その品々を買ひ集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があつた。セリヌンティウスセリヌンティウスである。今は此のシラクスの市で、石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく逢わなかつたのだから、訪ねて行くのが楽しみである。歩いているうちにメロスは、まちの様子を怪しく思つ

た。ひつそりしている。もう既に日も落ちて、まちの暗いのは当りまえだが、けれども、なんだか、夜のせいばかりでは無く、市全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になつて來た。路で逢つた若い衆をつかまえて、何があつたのか、二年まえに此の市に來たときは、夜でも皆が歌をうたつて、まちは賑やかであつた筈だが、と質問した。若い衆は、首を振つて答えなかつた。しばらく歩いて老爺ろうやに逢い、こんどはもつと、語勢を強くして質問した。老爺は答えなかつた。メロスは両手で老爺のからだをゆすぶつて質問を重ねた。老爺は、あたりをはばかる低声で、わずか答えた。

王様は、人を殺します。

なぜ殺すのだ。





おどろいた。国王は乱心か。

はい、はじめは王様の妹婿さまを。それから、御自身のお世嗣よつぎを。それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレキス様を。

たくさんの人を殺したのか。

悪心を抱いている、というのがですが、誰もそんな、悪心を持つては居りませぬ。



いいえ、乱心ではございません。人を、信ずる事が出来ぬ、という
のです。このごろは、臣下の心をも、お疑いになり、少しく派手な
暮らしをしている者には、人質ひとりずつ差し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架にかけられて、殺されます。きょう
は、六人殺されました。

聞いて、メロスは激怒した。



呆れた王だ。生かして置けぬ。

メロスは、単純な男であった。買い物を、背負ったままで、のそのそ王城には
いって行つた。たちまち彼は、巡邏じゅらうの警吏に捕縛された。調べられて、メロスの
懷中からは短剣が出て來たので、騒ぎが大きくなつてしまつた。メロスは、王の
前に引き出された。

この短刀で何をするつもりであつたか。言え！

暴君^{デイオニス}は静かに、けれども威厳^{もつ}を以て問いつめた。その王の顔は蒼白^{そうはく}で、眉間^{みけん}の皺^{しわ}は、刻み込まれたように深かつた。

市を暴君の手から救うのだ。

とメロスは悪びれずに答えた。

おまえがか？

王は、憫笑^{びんしよう}した。

仕方の無いやつじゃ。おまえには、わしの孤独がわからぬ。

言うな！



とメロスは、いきり立つて反駁^{はんぱく}した。

人の心を疑うのは、最も恥ずべき惡徳だ。王は、民の忠誠をさえ疑つて居られる。

疑うのが、正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。



暴君は落着いて咳^{つぶや}き、ほっと溜息^{ためいき}をついた。



わしだって、平和を望んでいるのだが。



なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か。



こんどはメロスが嘲笑した。



だまれ、
下賤げせんの者。



罪の無い人を殺して、何が平和だ。

王は、さつと顔を挙げて報いた。



口では、どんな清らかな事でも言える。わしには、人の腹綿の奥底
が見え透いてならぬ。おまえだって、いまに、磔はりつけになつてから、
泣いて詫びたつて聞かぬぞ。



ああ、王は慄巧りこくうだ。自惚うぬぼれているがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚
悟で居るのに。命乞いなど決してしない。ただ、――

と言いかけて、メロスは足もとに視線を落し瞬時ためらい、

ただ、私に情をかけたいつもりなら、処刑までに三日間の日限を与
えて下さい。たつた一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。
三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰つて来
ます。



ばかな。

と暴君は、しわが嘆れた声で低く笑った。



とんでもない嘘うそを言うわい。逃がした小鳥が帰つて来るというのか。



そうです。帰つて来るのです。

メロスは必死で言い張つた。



私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。妹が、私の帰りを待っているのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この市にセリヌンティウスという石工がいます。私の無一の友人だ。あれを、人質としてここに置いて行こう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮まで、ここに帰つて来なかつたら、あの友人を絞め殺して下さい。たのも、そうして下さい。

それを聞いて王は、残虐な気持で、そつと北叟笑ほくそえんだ。生意氣なことを言うわい。どうせ帰つて来ないにきまつている。この嘘つきに騙だまされた振りして、放してやるもの面白い。そうして身代りの男を、三日目に殺してやるのも氣味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。世の中の、正直者とかいう奴輩やつぱらにうんと見せつけてやりたいものさ。



願いを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰つて來い。おくれたら、その身代りを、きっと殺すぞ。ちょっとおくれて來るがいい。おまえの罪は、永遠にゆるしてやろうぞ。



なに、何をおっしゃる。



はは。いのちが大事だつたら、おくれて來い。おまえの心は、わかつてゐるぞ。

メロスは口惜しく、地団駄じだんだ踏んだ。ものも言いたくなくなつた。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君デイオニスの面前で、佳き友と佳き友は、二年ぶりで相逢うた。メロスは、友に一切の事情を語つた。セリヌンティウスは無言で首肯うなづき、メロスをひしと抱きしめた。友と友の

間は、それでよかつた。セリヌンティウスは、縄打たれた。メロスは、すぐに出発した。初夏、満天の星である。

メロスはその夜、一睡もせずに十里の路を急ぎに急いで、村へ到着したのは、翌朝の午前、陽は既に高く昇って、村人たちは野に出て仕事をはじめていた。メロスの十六の妹も、きょうは兄の代りに羊群の番をしていた。よろめいて歩いて来る兄の、疲労困憊こんぱいの姿を見つけて驚いた。そうして、うるさく兄に質問を浴びせた。



なんでも無い。

メロスは無理に笑おうと努めた。



市に用事を残して來た。またすぐ市に行かなければならぬ。あす、おまえの結婚式を挙げる。早いほうがよかろう。

妹は頬をあからめた。



うれしいか。綺麗きれいな衣裳も買つて來た。さあ、これから行つて、村の人たちに知らせて來い。結婚式は、あすだと。

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰つて神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

眼が覚めたのは夜だった。メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。そうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼んだ。婿の牧人は驚き、それはいけない、こちらには未だ何の仕度も出来ていない、葡萄ぶどうの季節まで

待つてくれ、と答えた。メロスは、待つことは出来ぬ、どうか明日にしてくれ給え、と更に押してたのんだ。婿の牧人も頑強であつた。なかなか承諾してくれない。夜明けまで議論をつづけて、やつと、どうにか婿をなだめ、すかして、説き伏せた。結婚式は、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆い、ぽつりぽつり雨が降り出し、やがて車軸を流すような大雨となつた。祝宴に列席していた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持を引きたて、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのも懐こらえ、陽気に歌をうたい、手を拍うつた。メロスも、満面に喜色を湛たたえ、しばらくは、王とのあの約束をさえ忘れていた。祝宴は、夜に入つていよいよ乱れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなつた。メロスは、一生このままここにいたい、と思つた。この佳い人たちと生涯暮して行きたいと願つたが、いまは、自分からだで、自分のものでは無い。ままならぬ事である。メロスは、わが身に鞭打ち、ついに出発を決意した。あすの日没までには、まだ十分の時が在る。ちょつ

と一眠りして、それからすぐに出発しよう、と考えた。その頃には、雨も小降りになつていよう。少しでも永くこの家に愚図愚図とどまつていたかった。メロスほどの男にも、やはり未練の情というものは在る。今宵呆然、歓喜に酔つているらしい花嫁に近寄り、



おめでとう。私は疲れてしまつたから、ちょっとどこか免こうむつて眠りたい。眼が覚めたら、すぐに市に出かける。大切な用事があるのだ。私がいなくとも、もうおまえには優しい亭主があるのだから、決して寂しい事は無い。おまえの兄の、一ばんきらいなものは、人を疑う事と、それから、嘘をつく事だ。おまえも、それは、知っているね。亭主との間に、どんな秘密でも作つてはならぬ。おまえに言いたいのは、それだけだ。おまえの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまえもその誇りを持つていろ。

花嫁は、夢見心地で首肯^{うなづ}いた。メロスは、それから花婿の肩をたたいて、



仕度の無いのはお互さま。私の家にも、宝といつては、妹と羊だけだ。他には、何も無い。全部あげよう。もう一つ、メロスの弟になつたことを誇ってくれ。

花婿は揉^もみ手して、てれていた。メロスは笑つて村人たちにも会釈^{えしゃく}して、宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだように深く眠つた。

眼が覚めたのは翌日^{あさひ}の薄明の頃である。メロスは跳ね起き、南無三、寝過ぎたか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分間に合う。きょうは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑つて磔の台に上つてやる。メロスは、悠々と身仕度をはじめた。雨も、いくぶん小降りになつてゐる様子である。身仕度は出来た。さて、メ

ロスは、ぶるんと両腕を大きく振って、雨中、矢の如く走り出た。

私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。身代りの友を救う為に走るのだ。王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。走らなければならぬ。そうして、私は殺される。若い時から名誉を守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかつた。幾度か、立ちどまりそうになつた。えい、えいと大声挙げて自身を叱りながら走つた。村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には、雨も止み、日は高く昇つて、そろそろ暑くなつて來た。メロスは額^{ひたい}の汗をこぶしで払い、ここまで来れば大丈夫、もはや故郷への未練は無い。妹たちは、きっと佳い夫婦になるだろう。私には、いま、なんの気がかりも無い筈だ。まつすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。そんなに急ぐ必要も無い。ゆっくり歩こう、と持ちまえの呑氣^{のんき}さを取り返し、好きな小歌をいい声で歌い出した。ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそろ全里程の半ばに到達した頃、降つて湧いた災難、メロスの足は、はたと、とまつた。見よ、前方の川を。きのうの豪雨で山

の水源地は氾濫はんらんし、濁流滔々とうとうと下流に集り、猛勢一挙に橋を破壊し、どうどうと響きをあげる激流が、木葉微塵こっぱみじんに橋桁はしげたを跳ね飛ばしていた。彼は茫然と、立ちすくんだ。あちこちと眺めまわし、また、声を限りに呼びたててみたが、繫舟けいしゅうは残らず浪に浚さらわれて影なく、渡守りの姿も見えない。流れはいよいよ、ふくれ上がり、海のようになつていて。メロスは川岸にうずくまり、男泣きに泣きながらゼウスに手を挙げて哀願した。



「ああ、鎮しずめたまえ、荒れ狂う流れを！時は刻々に過ぎて行きます。太陽も既に真昼時です。あれが沈んでしまわぬうちに、王城に行き着くことが出来なかつたら、あの佳い友達が、私のために死ぬのです。

濁流は、メロスの叫びをせせら笑う如く、ますます激しく躍り狂う。浪は浪を呑み、捲き、煽あおり立て、そうして時は、一刻と消えて行く。今はメロスも覚

悟した。泳ぎ切るより他に無い。ああ、神々も照覧あれ！濁流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、いまこそ発揮して見せる。メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇のようにのた打ち荒れ狂う浪を相手に、必死の闘争を開始した。満身の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきと搔きわけか搔きわけ、めくらめつぽう獅子奮迅の人の子の姿には、神も哀れと思ったか、ついに憐憫れんびんを垂れてくれた。押し流されつつも、見事、対岸の樹木の幹に、すがりつく事が出来たのである。ありがたい。メロスは馬のように大きな胴震いを一つして、すぐにまた先きを急いだ。一刻といえども、むだには出来ない。陽は既に西に傾きかけている。ぜいぜい荒い呼吸をしながら峰をのぼり、のぼり切って、ほっとした時、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。

待て。





何をするのだ。私は陽の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。
放せ。



どっこい放さぬ。持ちもの全部を置いて行け。



私にはいのちの他には何も無い。その、たった一つの命も、これか
ら王にくれてやるのだ。



その、いのちが欲しいのだ。



さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな。

山賊たちは、ものも言わず一斉に棍棒こんぼうを振り上げた。メロスはひよいと、から

だを折り曲げ、飛鳥の如く身近かの一人に襲いかかり、その棍棒を奪い取つて、



気の毒だが正義のためだ！

と猛然一撃、たちまち、三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙に、さっさと走つて峠を下つた。一気に峠を駆け降りたが、流石に疲労し、折から午後の灼熱の太陽がまともに、かつと照つて来て、メロスは幾度となく眩暈さまいを感じ、これではならぬ、と気を取り直しては、よろよろ一、三歩あるいて、ついに、がくりと膝を折つた。立ち上る事が出来ぬのだ。天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。ああ、あ、濁流を泳ぎ切り、山賊を三人も撃ち倒し韋駄天いだてん、ここまで突破して来たメロスよ。真の勇者、メロスよ。今、ここで、疲れ切つて動けなくなるとは情無い。愛する友は、おまえを信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。おまえは、稀代きたいの不信の人間、まさしく王の思う壘つぼだぞ、と自分を叱つてみるのだが、全身萎なえて、もはや芋虫いもむしほどにも前進かなわぬ。路傍の草原にごろりと寝こ

ろがった。身体疲労すれば、精神も共にやられる。もう、どうでもいいという、勇者に不似合いな不貞腐れた根性が、心の隅に巣喰つた。私は、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みじんも無かつた。神も照覧、私は精一ぱいに努めて来たのだ。動けなくなるまで走つて來たのだ。私は不信の徒では無い。ああ、できてる事なら私の胸を截^たち割つて、真紅の心臓をお目に掛けたい。愛と信実の血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。けれども私は、この大事な時に、精も根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きっと笑われる。私の一家も笑われる。私は友を欺^{あざむ}いた。中途で倒れるのは、はじめから何もしないのと同じ事だ。ああ、もう、どうでもいい。これが、私の定つた運命なのかも知れない。セリヌンティウスよ、ゆるしてくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を、欺かなかつた。私たちは、本当に佳い友と友であつたのだ。いちどだつて、暗い疑惑の雲を、お互^{おなが}い胸に宿したことは無かつた。いまだつて、君は私を無心に待つてゐるだろう。ああ、待つてゐるだろう。ありがとう、セリヌンティ

ス。よくも私を信じてくれた。それを思えば、たまらない。友と友の間の信実は、この世で一ばん誇るべき宝なのだからな。セリヌンティウス、私は走ったのだ。君を欺くつもりは、みじんも無かつた。信じてくれ！私は急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囮みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りて來たのだ。私だから、出来たのだよ。ああ、この上、私に望み給うな。放つて置いてくれ。どうでも、いいのだ。私は負けたのだ。だらしが無い。笑つてくれ。王は私に、ちょっとおくれて來い、と耳打ちした。おくれたら、身代りを殺して、私を助けてくれると約束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になつてみると、私は王の言うままになつてている。私は、おくれて行くだろう。王は、ひとり合点して私を笑い、そうして事も無く私を放免するだろう。そうなつたら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切者だ。地上で最も、不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがい無い。いや、それも私の、ひとりよがりか？あ

あ、もういっそ、悪徳者として生き伸びてやろうか。村には私の家が在る。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すような事はしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかつたか。ああ、何もかも、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬる哉。かな——四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまつた。

ふと耳に、潺々^{せんせん}、水の流れる音が聞えた。そつと頭をもたげ、息を呑んで耳をすました。すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上つて、見ると、岩の裂目から滾々^{こんこん}と、何か小さく囁きながら清水が湧き出でているのである。その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手で掬^{すく}つて、一くち飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労恢復^{かいふく}と共に、わずかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名譽を守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投

じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を、待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は、信じられている。私の命なぞは、問題ではない。死んでお詫び、などと気のいい事は言つて居られぬ。私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ！メロス。

私は信頼されている。私は信頼されている。先刻の、あの悪魔の囁きは、あれは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまえ。五臓が疲れているときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロス、おまえの恥ではない。やはり、おまえは真の勇者だ。再び立つて走れるようになつたではないか。ありがたい！私は、正義の士として死ぬ事が出来るぞ。ああ、陽が沈む。ずんずん沈む。待ってくれ、ゼウスよ。私は生れた時から正直な男であった。正直な男のままにして死なせて下さい。

路行く人を押しのけ、跳ねとばし、メロスは黒い風のように走った。野原で酒宴の、その宴席のまつただ中を駆け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴とば

し、小川を飛び越え、少しづつ沈んでゆく太陽の、十倍も早く走った。一団の旅人と颶さつとすれちがつた瞬間、不吉な会話を小耳にはさんだ。「いまごろは、あの男も、磔にかかっているよ。」ああ、その男、その男のために私は、いまこんなに走っているのだ。その男を死なせてはならない。急げ、メロス。おくれてはならぬ。愛と誠の力を、いまこそ知らせてやるがよい。風態なんかは、どうでもいい。メロスは、いまは、ほとんど全裸体であつた。呼吸も出来ず、二度、三度、口から血が噴き出た。見える。はるか向うに小さく、シラクスの市の塔楼が見える。塔楼は、夕陽を受けてきらきら光っている。



ああ、メロス様。

うめくような声が、風と共に聞えた。



誰だ。

メロスは走りながら尋ねた。



フィロストラトスでござります。貴方のお友達セリヌンティウス様の弟子でござります。

その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。



もう、駄目でござります。まだでござります。走るのは、やめて下さい。もう、あの方をお助けになることは出来ません。



いや、まだ陽は沈まぬ。



ちょうど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かった。おうらみ申します。ほんの少し、もうちょっとでも、早かつたなら！



いや、まだ陽は沈まぬ。メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕陽ばかりを見つめていた。走るより他は無い。



やめて下さい。走るのは、やめて下さい。いまは「自分のお命が大事です。あの方は、あなたを信じて居りました。刑場に引き出されても、平氣でいました。王様が、さんざんあの方をからかっても、メロスは来ます、とだけ答え、強い信念を持ちづづけている様子でございました。



それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいものの為に走っているのだ。ついて来い！フィロストラトス。



ああ、あなたは気が狂つたか。それでは、うんと走るがいい。ひとつしたら、間に合わぬものでもない。走るがいい。

言うにや及ぶ。まだ陽は沈まぬ。最後の死力を尽して、メロスは走った。メロスの頭は、からっぽだ。何一つ考えていない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走った。陽は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとした時、メロスは疾風の如く刑場に突入した。間に合つた。



待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰つて來た。約束のとおり、いま、歸つて來た。



と大声で刑場の群衆にむかって叫んだつもりであつたが、喉^{のど}がつぶれて嘔^{しゃが}れかすた声が幽^{かす}かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。すでに磔の柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンティウスは、徐々に釣り上げられてゆく。メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆を搔きわけ、搔きわけ、



私だ、刑吏！殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいる！



と、かすれた声で精一ぱいに叫びながら、ついに磔台に昇り、釣り上げられてゆく友の両足に、齧^{かじ}りついた。群衆は、どよめいた。あっぱれ。ゆるせ、と

口々にわめいた。セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。



セリヌンティウス。

メロスは眼に涙を浮べて言った。



私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若し^も私を殴つてくれなかつたら、私は君と抱擁する資格さえ無いのだ。殴れ。

セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首^{うなづ}肯き、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴つた。殴つてから優しく微笑み、



メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑つた。生れて、はじめて君を疑つた。君が私を殴つてくれなければ、私は君と抱擁できない。

メロスは腕に唸^{うな}りをつけてセリヌンティウスの頬を殴つた。

ありがとう、友よ。

いた。

群衆の中からも、歎^{きよき}歎^{きよき}の声が聞えた。暴君ディオニスは、群衆の背後から二人の様を、まじまじと見つめていたが、やがて静かに一人に近づき、顔をあからめて、こう言った。



おまえらの望みは叶かなつたぞ。おまえらは、わしの心に勝つたのだ。
信実とは、決して空虚な妄想ではなかつた。どうか、わしをも仲間
に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえら
の仲間の一人にしてほしい。

どつと群衆の間に、歓声が起つた。

万歳、王様万歳。



ひとりの少女が、緋ひのマントをメロスに捧げた。メロスは、まごついた。佳き
友は、気をきかせて教えてやつた。



メロス、君は、まっばだかじやないか。早くそのマントを着るがいい。この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。

勇者は、ひどく赤面した。

(古伝説と、シルレルの詩から。)

底本：「太宰治全集3 ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日初版発行

1998（平成10）年6月15日第2刷

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：金川一之

校正：高橋美奈子

2000年12月4日公開

2011年1月17日修正

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
[\(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。